

2016 年度後期政策過程論講評

採点を終えたので講評を行う。今年度後期の問題は以下の通り。二問中一問選択で、どちらか一問しか評価の対象としない、という例年同様のパターン。

1. アリソンの第三モデル（官僚政治モデル）は政治過程論との親和性が高い。どういう意味か説明してください。

2. 政治過程を時系列で分けるとき決定過程の前に置かれる、いわゆる前決定過程の理論（議題設定の理論とも呼ばれる）は、政治過程を複数の部分過程の集合と見るアリーナの理論と密接な関わりを持っている。どういう関わり方をしているのか、解説してください。

少し難易度に差がありすぎた感もあり、第二問に答えたのは二名のみで、他はみな、第一問に答えていた。受講登録者 172 名、受験者 153 名。受験者のうち 1 名が受講者の中に名前のない学生で現在、調査中。一応採点は行ったが、成績は出せないことになると思われる。受講登録の確認出来た受験者 152 名と登録者 172 名の差、20 名が不受験により落第（F）となった者になる。

昔は不受験、白紙などは成績に残らない処理をしていたのだが、現在は受講登録をすれば F を含めて必ず成績を出すので、試験を受けないと F が付き、GPA を下げてしまう。受けない科目は登録しない方がいいのだが。昔の学生は「C になるようなら落としてください」と答案に書いたものだが、これは今の学生の文化からは消え去ってしまった。

ま、そういう懐旧趣味をぐだぐだ書いていてもしょうがないので、早速、成績の分布からまとめてみよう。

	A+	A	B	C	F	計
2 回生	0	10	30	23	10	73
3 回生	0	8	29	20	4	61
4 回生	3	6	9	4	11	33
5 回生以上	0	2	0	1	1	4
計	3	26	68	48	26	171

先に記したように、不受験者が 20 名いて、これが当然 F なので、受験して F 評価を受けたものは 6 名だけ、ということ。また第二問に回答した者が二名しかいなかったのも、ほとんどが第一問に答えた、ということである。

第一問はアリソンの第三モデルと政治過程論の親和性を説明する、ということだから、ア

リソンの第三モデルと政治過程論をそれぞれきちんと説明し、その関連を論ずることができればよい、ということになる。採点に際しても、第三モデルの説明、政治過程論の説明、両者の親和性の解説、これを三本柱として、すべてにきちんと答えられているものがAで、二点目まではできていそうだが、三つというわけには行かないものがB、なんとなく書いてはあるが、どれも不十分と思えるものがC、ちょっと救いようがない、あるいは完全な不実記載がFということになった。Bとした答案の大部分は、第三モデルについても政治過程論についてもそれらしいことは書いてあるのだが、それぞれが関連づけて書かれていないものであった。第三モデルをアリソンの他の第一、第二モデルと比較しながら書いていけば明らかなのだが、第一モデルが単純化による全体の合理主義、第二モデルが限定合理性を前提に状況を細分化しての、その範囲での合理主義であるのに対して、第三モデルはそもそも合理主義を取らない。解くのは単純化された単数形の問題や人間の知性が届く範囲での単数形の問題ではなく、それぞれのアクターがそれぞれ定義を異ならせているそれぞれの問題の集まり、複数形の問題（諸問題）なのであり、そこに描かれているのは合理主義への不審、不可知論なのである。政治過程論との親和性はまさにここにこそある。

参考に読んだものがまずいのか、第三モデルは第二モデルをさらに細分化しているとか、政治過程論は統計学や科学を使うとか、視点によっては間違いとは言えないが、本質的には設問とは関係がない、あるいはむしろ設問との関係では本質的な理解が足りないと思えるようなものが出てきて、少々うんざりした。確かに第三モデルは組織からさらに組織の中の個人の役割にまで分析単位を小さくしたようにも見えるし、政治過程論は現代の分析的政治科学だから統計学なども使わなくはない。議論の焦点が理解できていれば、とてもそのようなものが解答にはならないだろうというのがわかるはずだと思うのだが、最近、学生たちは自分で自分の頭を使わなくなったのだろうか、と思った。

感心させられる答案が4回生のものにしか見当たらないというのはどういうことか、と思うが、第一問に答えてA+を取った者は、●●●●、●●●●●、●●●●の三名である。

二問目は、そもそも受験者が二名で、よく似た答案だったが、いずれもあまりよい答案ではなかったので、論評しなくてもいいかとも思ったが、簡単に押さえておこう。要は、前決定過程理論と呼ばれるものがどのようなものであるのかを説明し、そのどういうところが、アリーナ理論と関連性を持っているのかを論じる。あるいは、アリーナ理論から行って、これがどのような理論的インパクトを持っているか、から、前決定過程理論が探ろうとしたこととの深い関連性に触れる、というような方向で議論するというのが正解である。前決定過程というのは顕在的政策過程が動き出すまでのアジェンダセッティングを指し、これが、非決定理論のような論証不能な一種の神話に解消するのではなく、特定の課題がアジェンダとなっていくメカニズムに触れていく議論だから、扱われる政策の特性そのものに当然ながら注目する。政策の特性によりアジェンダになりやすい・なりにくい差異があったり、アジェンダに導かれる経路に差異が生じたりするという議論につながっていくわけで、こ

このところが政策の特性によりそれがどのようなプロセスに乗っていくかに差異が生じていくというアリーナ理論とほぼ同じ分析上の焦点を持っていることが理解されるであろう。そのあたりがきちんと論じられていれば A 以上の評価となる。回答してくれた答案はかなり丁寧にロウイを追ったものであったが、この設問への解としては見当違いであった。